

和みの村、モアルボアールでのダイビングライフ

Photo & Text : Takaji Ochi
Special thanks : Tiki Tiki Divers,
World Tour Planners



フィリピンはセブ島の隠れ里と、ダイビング雑誌でよく表現されるモアルボアール。そんな隠れ里で隠遁生活を送るダイビングガイド家族がいる。別に彼らは隠遁生活をしてるつもりは毛頭ないのだろうが、場所が場所だけにそんな印象を受ける。この村の雰囲気は、素朴さを求めるダイバーにはなんと魅力的だが、彼らの存在がさらにその雰囲気を深いものにしていている。フィリピンの田舎町の陽だまりの中で、のんびりと暮らす彼らの生活の中に、ちょっとだけ入り込ませてもらうことで、他では手に入らない和みをもたらしているような気分になれる。



「じゃあ、そろそろ行きますか〜」という、カソ君のまったりしたかけ声とともに、モアルボアールでのダイビングが始まる(上)
モアルボアールの市場には、アフターダイビングで見学に行くこともある(右)
リーフトップのサンゴの元気さは必見だ。(カサイリーフ/右)



今回は、PDFとともに、昨年の取材で撮影した海中と村の様子の動画も一緒にアップしたので、是非ご覧ください。

 [click!](#) [ムービーリンクへジャンプ](#)

Philippines Moalboal
www.web-lue.com

Web-lue 2006. Summer

 **Information Link** [click!](http://www.wtp.co.jp/renewal/moalboal/index.htm) 情報HPへジャンプ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/moalboal/index.htm>

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

「それにしても良くしゃべる奴だな〜」。彼に会った第一印象である。彼とは、モアルポアールでダイビングサービス、チキチキダイバーズを営んでいるオーナーガイドの渡部勝行君(以下、カツ君)の事だ。彼と初めて出会ったのは、2003年の11月。僕が西表のサカナさんと一緒に雑誌ダイビングワールドでリロアンのマリンビレッジ取材していた時の事。当時まだモアルポアールでサービスをオープンする前だった彼が、取材のヘルプ(?)にやっていた。

僕と二人で取材していた時は、政治やら経済のまじめ〜な話をしてきたサカナさんが、彼が加わったと同時に、突如嬉しそうに下ネタを連発し始めた(本来のサカナさんに戻った?)。しゃべり過ぎるくらいはあるけど、彼には人をリラックスさせる雰囲気があるのだろう。

ちょっとしゃくれた感じに顎を突き出して、まくし立

てるように何かをしゃべり続ける。たまに唾も飛んでくる。うるさいと思うんだけど、そのしゃべりが妙に間が良くて、突っ込みを入れたいくなる軽快さがある。だから「しょうがないな〜」と思える。そんなキャラクターだ。だからアフターダイブなんかには、ちょっとガイドをいじってみたい人にはお勧めかもしれない。「そういう意味では今が旬なのかもしれないな」と思った。

ジンベエ出ちゃいましたね

マリンビレッジでの取材後、僕たちはサカナさんと別れて、二人でモアルポアールへ移動した。「来年の正月から、ゲストの予約を受けて、オペレーションを開始するんです。その事前取材をお願いしたい」それが彼の要望だった。

「で、何が见れるの?」最初に打ち合わせをした時に、「年

ジンベエザメの目撃情報からすると通年定期的に回遊しているようだ



おしゃべりなガイドとの出会い



黙ってれば、学者っぽくて渋い(?)んだけどね〜(左)
船上でのんびりと打ち合わせをする(上)

間100回くらいジンベエの目撃情報があるんですよ。だからまずジンベエを……。何言ってるんだと思った。年間100回と言っても同じ人が100回見てるわけではない。ここにあるダイビングサービス全てのガイドの目撃情報ということだから、1日に同じ個体が5人の別のガイドに目撃されれば、5回分の目撃ということになるらしい。

「今回のリサーチ取材は、4本しか潜るチャンスが無い。それで見れたら本当にラッキーだ」そう思いながら二人で、1本目のダイビングに出かけた。ターゲットは、ジンベエではなく、ドロップオフに生息するフィリピン特有の魚たち。スプリングダムゼル、パークダムゼル、タルポットダムゼル、ニチリンダテハゼ、キャンディーケインドワーフゴビー、オランウータンクラブなどなど。さすが生物層の厚いフィリピンだけあって、ドロップオフで潜っていても撮影する被写体は尽きることがなかったのだが、忍耐力の無い僕は、結構適当に撮影しては、フラフラと場所を移動していた。「ふ〜、まあ、こんなもんだな」。この時もスプリングー

ダムゼルの撮影を適当に終了して、ドロップオフからブルーウォーターに視線を移した。そこには、僕のワイドレンズを装着したカメラのハウジングを持って、「え、撮影もう終わりですか?本当に撮れてるんですか?」というように、こちらを大きな目で凝視しているカツ君がいた。そこまでは良かったのだが、その真後ろになんとか壁画のようなものが、!!「んっ!ジンベエ?」。そのジンベエは、まさに今僕らの目の前を通過していくところだった。

僕はマクロレンズの着いたカメラをカツ君に放り投げると同時に、ジンベエに対して後ろを向いていて、何が起こったんだか理解をしていない彼の手からワイド用のカメラを奪い取り、ジンベエに向かってダッシュをかました。なんとか数カット撮影することができた後、ジンベエは足早に去って行った。

エキジットと同時に、水面で「いや〜、ジンベエ本当に出ちゃいましたね。どうしましょう」と妙な発言をする彼に「そうだね、本当に出ちゃったね、どうしよう」と僕も妙な返事を返していた。



アットホームなファミリーダイビングサービス、ティキティキダイバーズのスタッフ。2005年12月撮影(左)カツ君と長男の天君、子供の方は完全に地元の子供たちに同化している(右)



気になる渡部一家

その翌年の同じ時期(2004年11月)、僕は再び彼の元を訪れた。この時、カツ君はすでにビーチフロントにダイビングサービス「チキチキダイバーズ」を構え、家族も一緒に生活をしていた。以前ドゥマゲッティにある同じサービスでガイドをしていた奥さんのゴンちゃん(女性なのに、何故ゴンちゃんと言うのかは忘れた)。それに3歳の男の子が一人、生まれたばかりの女の子が一人。ダイビングサービスの海に面した窓際に作られた、大きな台の上に敷かれたマットの上で、子供たちはベビーシッターに子守されながら昼寝をしていた。まるで田舎の親戚の家を訪ねたような雰囲気、心に和む。

(あ〜、この村に合ってるし、彼ららしい経営スタイルだな)。完全にファミリー中心、それは僕のライフスタイルに通じるものもある。奥さんがフィリピン人ならいざ知らず、二人とも日本人で、よくぞこのセブの田舎町で、周囲にまったく日本人がいない(もう一件ダイビングサービスを経営する日本人がいるのだが、そ

の人の奥さんはフィリピン人)環境で子育てしながらダイビングサービスを経営する決心をしたものだ。旦那がよっぽどノーテンキか、奥さんがよっぽど肝っ玉が座っていないければ無理だと思った。彼らには失礼な言い方かもしれないが、僕は彼だけでなく、この渡部一家がこの地でどこまでやっていけるのか、見届けてみたくなった。

ちなみに、「チキチキ」とは現地の言葉で「ジンベエザメ」だと聞いた。「ここでこの名前は無謀だな」とちょっと思った。

この年、カツ君はマクロポイントの開拓と、サンゴの綺麗なリーフのリサーチに力を入れていた。ただ、僕がマーシャル諸島などでサンゴの撮影をしているのを知っているからか、サンゴのポイントを紹介するたび、僕がどんな感想を述べるかを気にしていたようだった。

彼はコンゴポイントのサンゴを一押ししていたが、僕が気に入ったのは、カサイリーフのドロップオフのトップに群生する色鮮やかなサンゴ礁。このサンゴの

色は、青、黄色、紫、ピンクと、かなりカラフル。それにデバズメダイやフィリピンズメダイ、ニセネッタイスズメダイ、メラネシアンアンティアス、ハナゴイなどが程よく群れていて、サンゴに色を添えている。それにドロップオフの際にあるから、青い海をバックにできるので、撮影するならこちらのポイントの方がお勧めのように思える。このポイントでは、ウミガメも頻繁に目撃できるので、サンゴとウミガメ、それに「ひよっとしたらジンベエ」なんて期待を寄せながら潜るのが面白かった。

モアルポアールで一番人気のポイントは、何と云ってもベスカドール島だ。島の周囲はドロップオフ、その

リーフ上には、カサイリーフで見れる種類とはまた違ったサンゴの大群生地になっていて、こちらも無数のメラネシアンアンティアスが乱舞している。群れの多さはかなり強烈だ。しかし、メラネシアンって、案外地味な配色で、写真で撮影すると「う〜ん、イマイチ」って思ってしまうのが難点だ。キンギョハナダイくらい

の明るさがあれば、もっと気合がはいるのに。ということで、この年は、サンゴのリーフ撮影を中心にしながら、マクロ撮影、そして、どのポイントでもジンベエの出現を期待しながら潜ったのだが、遭遇することは無かった。

カラフルな色彩を持つサンゴ



カサイリーフのドロップオフにはサイズの大きいウミガメの個体数も多く見られるベスカドール島の浅場に群生するサンゴとその上で乱舞するメラネシアンアンティアス





そして2005年12月、三たび彼らの元を訪れる。このとき、ゴンちゃんのお腹の中には、第3子がいて、もう1ヶ月もしないうちに生まれるという頃だった。「3人かへ、すごいね」と感嘆する僕に、「あと2人は欲しいですね」と答えるカツ君。「え、じゃあ5人ってこと?」、「ええ、まあそういうことになりますね」。このノーテンキさは、どういことだ。その話を横で笑って聞いている奥さんも奥さんだ。完全に地元と同化しているとは思えない。褐色の肌をして、まったく地元の子供たちに同化して遊んでいる長男が、サービスの窓から見えるビーチで腕白振りを発揮している。歩けるようになった長女も、お兄ちゃんと一緒に、外を駆け回っている。いつの間にか姿が見えなくなる。しかし、「あ、その辺、みんな知り合いですから、大丈夫ですよ」とお父さんもお母さんも、特に気にする素振りも見せない。

少子化の続く日本の人たち(彼らも日本人だけ)に彼らの生き様を見せてやりたい。そして、この共同体の

ような村の雰囲気、いかに小さな子供を育てるのに適しているか、それを皆に知ってもらいたい。モアルボアルの町から、ビーチに向かって細い道を行った終点が、彼らがダイビングサービスを構えるパナグサマビーチ。歩いて5分で端から端まで見て回れる。その中にダイビングサービスや、ダイバー向けの小さなリゾートが集中している。そこで生活する人々は、ほとんどが顔なじみのようだ。

夜、サービスからちょっと離れた屋台のようなシーフードレストランで食事するときも、子供たちは座っているのに飽きて、さっさと暗がり姿を消してしまっただ。それでもこの父親と母親はまったく気にもとめていなかった。「野良犬だっているのに」と言う「あ、最近保健所が来て、かたっぱしから注射していったから大丈夫ですよ」と言われても。そういう問題でもないだろう。

子供は野放しでオツケー



村の中ではTシャツやおみやげを売り歩く子供たちに良く出会う。彼らとのやり取りを面倒臭いと思うか、どうかここでの重要なポイントだ(左)
パナグサマビーチのメインストリートはこんな感じ。どっかの路地裏みたいだ(中)
モアルボアルの市場には、野菜、肉、果物、魚など、食べるものは何でもそろっている(右)



01



02

01:スカンクアネモネフィッシュ。右の個体には、顔の後ろに両サイド白い点があって、おばーちゃんクマノミと呼ばれている 02:ドロップオフにはニチリンダテハゼの個体数も多い 03:キャンディケインドーフゴビーもドロップオフにうじゃうじゃいる 04:巨大なスポンジの中を探すと、ピンクスクワットロブスターを発見 05:こちらもこの海では定番のタルポツダムゼル 06:ゴビーポイントの浅場のスロープに沢山生息しているカニハゼ 07:オラウータンクラブも数個体で一緒にいることも 08:ゴビーポイントノ浅場に生息するギンガハゼ。サイズはどちらかと言うと小さめが多かった 09:ゴビーポイントのスロープの中層からボトムにかけて多く生息しているリングアイジョーフィッシュ



03



04



05



06



07



08



09

10:クジャクスズメダイの体色は、ミクロネシアなどに比べると浅く、どちらかと言うとインド洋エリアの体色に近いような気がする 11:頭の天使の輪がかわいい、ローランドダムゼルの幼魚 12:コンディションさえ良ければ、ニシキテグリは100%の確率で見れそう。しかも撮影しやすい 13:サンゴの上でぼーっとしている、マンジュウイシモチ。これも個体数は多い 14:ベスカドール島水深30mで撮影したタイニードート 15:レッドマージンシュリンゴゴビー。こちらもゴビーポイントの浅場に生息



10



11



12



13



14



15

狙いはマクロ、マクロ、マクロ!

狙いはマクロ、マクロ、マクロ!

この年は、時期が遅かったために、天気の良いシーズンにかかってしまった。それだけが理由じゃないのだが、今回のターゲットはマクロ生物中心。マクロ撮影して背中をジンベエが通過しようが、とにかくマクロ。今までにない粘りで連日マクロ撮影に明け暮れた。

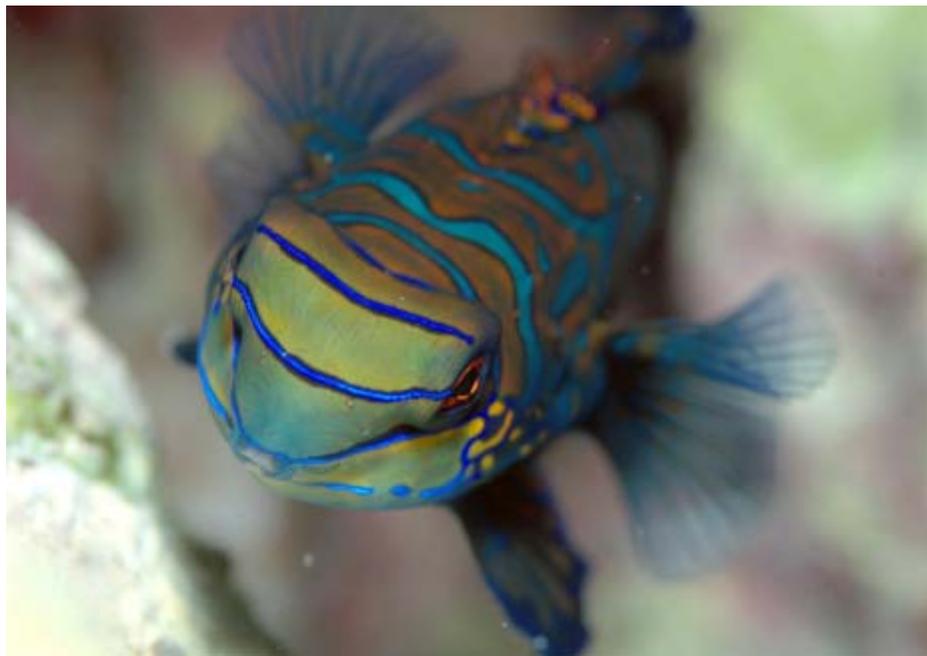
それは3年目になり、ようやくカツ君がどこにどんな生物がいるか自信を持ってガイドできるようになっていたからというもある。かっこつけて言えば「3年目にして、この海を自分のものにしたかな」という感じだった。

彼がゴビーポイントと名づけた砂泥地では、ブルーバードリボンゴビーのコロニーを撮影したり、コンゴでは、去年見つけることもできなかったニシキテグリがうじゃうじゃいるポイントに案内された。ペスカドールでもフチドリハナダイやモエギハゼの一種など、深場のアイドルフィッシュのバリエーションも増えていたし、それがどこにいるかを的確に案内してくれたので、とても効率良く撮影することができた。せっかくだから、今回撮影したマクロ生物を、できるだけ沢山この場で紹介したいと思う。



01

01: ペスカドールの水深30m付近から見る事ができるフチドリハナダイ(左)
02: ニシキテグリの個体数はかなり多く、周囲では何人ものダイバーがマイニシキテグリを撮影していた



02



03



04



05



06

03: アツチスズメダイの幼魚。成魚は地味だが、虫に刺されて腫れてしまったような特徴的な口が気になる 04: ゴビーポイントの浅場に多く生息しているギンガハゼ 05: スバインチークアネモネフィッシュもこの海では定番だ 06: サンゴの中にはインドカエルウオの幼魚なども見られる

今年も逢いに行けるかな?

そして、この年は家族とは別に、もう一人若くて元気なガイドがこのサービスに加わった。カツ君に向ける言葉は、横柄だったりするけど、彼がカツ君の人間性を慕っていることは、見ていればすぐにわかる。だからなおさら一緒にいる方は居心地が良い。

まだまだ駄目出しされることが多いようだが、水中でもてきばきしているし、素直で今の若い者にしては、とても好感が持てる(というとても年寄りみだが、まあしょうがない)。と本人に言ったら、「あまりおだてるのはやめてください。すぐ図に乗るから」と言ってる側で、彼はすでに自信満々の顔をしていた。

今年(2006年)は彼らの元を訪れられるかわからないが、3番目の子供にも逢いたいし、できればまた、船上やダイビング後のレストランでビールでも飲みながらカツ君のちょっとうるさいしゃべりに突っ込みを入れつつ、一緒に潜ればいいな、と思っている。